

地域共生社会推進フォーラム

つながりが生まれる場所



昨年12月3日(土)、京都府立京都学・歴彩館において協会として初めての「地域共生社会推進フォーラム」を開催しました。

「つながりが生まれる場所」をテーマに、協会の居宅、施設、児童館の3事業拠点からそれぞれ「地域共生」の活動事例について報告、次に富山県で「コミュニティハウスひとのま」を運営している宮田隼さんのゲストトーク、事例報告者と宮田さんがパネラーとなつてのトークセッションという3部構成で進められました。本号では、フォーラムのエッセンスをお伝えします。

ゲストトーク

ひとのま／宮田隼さんのお話

富山県の高岡市で、2011年から『誰でも集える場』として一軒家を開放してきた。「特定の誰か」「特定の何か」を救う場所、相談に乗る場所ではなく、ただ、「あなたさえよかったらいつでもどうぞ」とフルオープンで開け続けてきた結果、「この場所があつて助かった」という声を多く聞ける場所になってきた。

不登校、ひきこもり、孤立、発達障がい、精神疾患、生活困窮、DV被害者、刑務所からの出所者など様々な背景を持つ人が多く訪れるようになり、「手伝えることであれば手伝うよ」というスタンスで関わってきた。

「不登校になって、行くところがない」という声には、「よかったら家開けてますんでどうぞ」。「ひきこもってる子がいるんだけど、家から出れずに困っている」という声には、「よかったら家に行きましようか?」。「人付き合いが苦手だから、同じような人と繋がりたい」という声には、「じゃあいろいろ声かけて同じように悩んでいる人とお茶会しようか」と。

そのうちに、役割のようなものが芽生えてきた。ひとつは食料支援。いつの頃からか「食べるものを買う金もない」という人も市役所などを通じて訪れるようになった。「できることは何かないか」と考えた末、「ひとのま」で日常的に食料を集めて無理なく渡すという文化ができてきた。そして、「どうせ自分たちもご飯食べるから一緒に食べるようにすればいいじゃないか」と。今では週3回みんなで一緒に晩ご飯を食べるようになった。もちろん食事代はいただきません。

ふたつ目は住まいの支援についてです。「金もない、家もない、頼れる人もいない」という人に多く出会ってきました。この3つの「ない」が重なると再出発は大変です。金がないから仕事を探そうとしても、家がないと見つからない。だからと言って家を借りようとしても、金がないし、保証人もいない。連絡先がないと家も仕事も難しいからと携帯を契約しようにもそこに

も住所や保証人がいる。とにかく大変です。

そういう声を聞き、できることは何かと言うことで、これまで「ひとのま」で多くの方が仮住まいをしてきた。同様の理由で刑務所からの出所者も多く訪れる。「あなたさえよかったらいつでもどうぞ」、これからもそんな感じで家を開けながら、結果的に誰かの何かの役に立てればいいなと思っている。生活困窮という理由の他に、「家族からの暴力から逃れるため」に利用した人もいる。そして、他に行くところがなくてここに来たと、いう人がたくさんいる。これからも少しでも力になればらと思っている。このようなお話でした。

特に印象的だったのは、「市役所の方がいろいろな人を連れてきて」利用していくという話。制度の枠組みからこぼれる人を、「ひとのま」が型にはまらない懐深さで受け入れるという、フォーマルとインフォーマルの見事な、連携、役割分担だと思いました。

また、食事の利用に訪れた「おばちゃん」が好きな食べ物を独り占めするのに対して子どもたちが大ブーイングで訴えてきたが、特に介入・調整もしなかったところ、当事者同士で理解し合い、問題解決して共存するようになった話は、インフォーマルな場でこそ可能なユーザートラブルの自律的解決の見本のような話だと思いました。既存の制度を前提とする場では、どうしても職員などの福祉関係者は「解決」のために介入することが仕事だと考えがちなので、「目からウロコ」でした。

行政からすると超便利な「誰でも来ていい場所」

食べるものがなくなつて…

「ひとのまへ！」

泊るところがなくなつて…

「ひとのまへ！！」

刑務所から出てきて家も金も

家族もなくなつて…

「ひとのまへ！！！」



【事例1/小川施設】コロナ禍に、小川施設周辺で生まれたいくつかの地域活動の紹介を通じて、「ふくしの側(皮)に触れる」を報告。これまでもAssociéで紹介された『チーム上京!』(No.21)や『珈琲男団』『置きベン』(No.26)の他、『せせらぎ木工』、『上京パトラン』といった活動が少しずつ重なり、繋がりが合っている様子を紹介。各活動は困っている人を助けよう、地域課題を解決したいと大げさな動機ではなく、自分たちが楽しんでしている活動に、少しでも福祉のエッセンスを入れることで、“やりたいことをしていたら、暮らしやすくなっていた”とそんな風になっていければ。それが“ふくしの側(皮)に触れてもらう”だと話されました。側(皮)とは縁側であり薄皮で、内と外を隔てるもの。既存の仕組みの中に入り込んでもらうわけではなく、少し触れてもらい、役立っていると実感してもらうこと。いろんな人が自分のできる範囲で、街の課題に取り組んでいって、対話を通じて重なったり、繋がりが合って、総体として街を良くしていけるといいなとまとめられました。



【事例2/南事務所】2016年より、火金の朝8:30から敷地内を開放、地域の方も一緒に「ラジオ体操」を行っています(雨天中止)。元々は職員の自主的な健康管理の一環として始まったのが、東九条地域包括支援センター長の耳に入り「地域の方も誘ってみてはどうか」と提案されて、広がることになりました。1回平均、地域の方は14名程、職員は7~8名程の参加があり、一番多い方になると500回以上参加されています。キレよく動かれる方、座りながらされる方、おしゃべりを楽しむ方、体操だけしてさっさと帰る方など、各々が自由な形で、時間を共有されています。コロナ禍で中止を決定したとき「なんでや!」とひどく怒られましたが、再開を決定したとき「今日から再開!」と自転車で回られた方がおられ、「ラジオ体操は皆さんの居場所」と再認識させられました。「自由に誰にでも開かれた場、皆で季節を感じ、暑い日も寒い日も、いつもの場所でいつも通りの体操を続けています。」しめくくりの言葉が、継続することの大切さを伝えていました。



【事例3/修徳児童館】「児童館はまちのほけん室」という観点で、①地域のすべての子どもを対象に、**子どもの自立支援、子育て家庭支援、共生のまちづくり**を方針としている、②**見せる児童館、魅せる児童館**という発想で、地域に存在を実感してもらい、さまざまな人と協力して「**子どものミカタ**」となる、③「**子どものことなら児童館**」と思ってもらえるようになるために、日常的に地域を意識して活動していることが報告されました。そして、これらの活動を通じて、児童館が地域の子どもの安心・安全な居場所となるよう努めていることが強調されました。最後に修徳児童館が発信している動画が紹介されました。修徳児童館は、地域への発信を意識した活動として、You Tubeで動画をアップしています。



制度と制度外、壁を超え、「共に生きる」をつくる原動力はなにか

トークセッションでは、京都光華女子大学健康科学部准教授で協会職員OBでもある南多恵子さんがコーディネーターとなり、ひとの宮田隼さん、小川施設の中島慶行施設長、修徳児童館の木戸玲子館長がパネリストとして、多角的な意見交換が行われました。トークセッションの内容はファシリテーショングラフィッカーの三宅正太さんが分かりやすくまとめて下さいました。

■ 宮田さんの活動から刺激を受けたい

コーディネーターの南さんから、ひとまのインフォーマルにいろんな人を受け入れるのが得意、協会は制度に基づく事業展開などフォーマルが得意、対極にあるようだが、協会が宮田さんと呼ばれた趣旨を確認することから始めたいとの提起を受け、事務局の池田館長から「人によりそい、地域にかかわり、共にあゆむ」基本姿勢を考えたとき、宮田さんの顔が浮かび、刺激を受けたいと思ったとの趣旨が説明されました。また、事例報告についても、パネラーのみなさんから、取組内容は異なるが、それぞれ人と人とのつながりが大切との意識で共通しているとの感想を持ったことや、それぞれの得意を活かしながら地域とつながることが重要ということが表明されました。

■ 制度と制度外、それぞれの役割と連携

これを受けるかたちで、議論は「制度と制度外の関係」、「役割と連携」へと展開しました。宮田さんからは、「ひとのまだけで完全に解決した事例はほとんどない。ひとのまとしては、制度につながれない人につながることが大切と考えているが、不登校、ひきこもり、生活困窮など、この人たちが抱える問題はシングルイシューではなく、様々な問題が複合的に絡まっている。その人の問題を解決するには、制度の活用も制度外の取組も必要、例えばひとのまでも地域包括や生活保護担当者と連携して、一人のひきこもりの方の介護や生活保護の問題を解決している」と発言がありました。

制度との関わりについて木戸館長から、児童相談所のある担当者の制度にとらわれない取組と「制度化されていない、制度の隙間もみんなの取組で新しく制度ができていく」という言葉に、行政にもこのような職員がいるのだと感銘を受けたことが紹介されました。

また、制度の運用にあたって、制度を言葉のままに捉えると、できることは限られてくるが、ストライクゾーンぎりぎりを攻めてセーフに持ち込む努力も必要ではと南コーディネーターから指摘があり、このようなことも「制度の壁を超える努力」のひとつであるが、その原動力はどこから出てくるのかと話は発展しました。

■ それぞれの福祉の初心あるいは原点

「福祉の仕事をしている理由、大切にしていることは何か」。この問いかけに中島施設長は、「ケアハウスでの経験で、細々としたことでご入居者の相談を受けることがよくあったが、当事者にとっては些細な困りごとや不安がとて深刻なことであり、誰かが手助けしなければならぬことであつたりすると、制度上やるべきこととそうでないことの違いは重要ではなく、その人ために動くことが大切と日頃から考えている」と答えられました。



解決できるようにすることを大切にしている」との発言がありました。

さらに、宮田さんが枠の中で枠を超える努力はどのように見えるかとの質問に対して「例えば、教師は教師になった初心があると思う。初心を大切にしたいと思ったら、枠を超える努力は当然でくるのでは。福祉の仕事は損んだ人にもあると思う。初心、原点が大切」と問題提起をされ、これに対する中島施設長、木戸館長の「初心・原点」の話が印象的でした。

中島施設長は、「昔、人々はそれぞれの地域の助け合いで成り立っていたが、今は公共的なところは行政の役割になっている。一方、地域共生とは身近なところに自治をもう一度つくることと考えている、これが原点」と述べられました。

木戸館長からは、自身の原点をつくったある子どもとの出会いの経験を、かつて自身の力が及ばず何もできなかったという思いを糧にして、今は自身にできることがたくさんあるから「これからやる、やり続けたい」と熱く語られました。

宮田さんは、「難しく考えずに、同じ時代を生きる人同士、できることはやっていく心で日々努めている」と話されました。それぞれの思いを聞くことができ、興味深いトークセッションとなりました。



【朱雀事務所・高木はるみさん】

第一部は、当協会のパネリストによる事例紹介の後、富山県高岡市コミュニティハウス「ひとのま」代表宮田隼氏の活動実践紹介。10年経過し、つながりが生まれる場所として定着、一緒に考えそれぞれの人が持つ価値観を優先した支援につなげられています。第二部は、トークセッションが行われ、協会職員として「人によりそい地域にかかわり 共にあゆむ」という私たちの基本姿勢の意味を共通認識として実感することができました。

【修徳・渡辺拓磨さん】

今回のフォーラムでは他施設のつながりが生まれる場所やどのようにつながっているのかを知ることができたので、自施設でも今後の地域活動への参考になると思いました。宮田さんのコミュニティハウス「ひとのま」の様子やお話には思わず聞き入ってしまう魅力がありました。人柄や話しやすさも、つながりを形成していくことが大切だと改めて感じました。「ひとのま」での交流を聞き、様々な人の心の温かさに触れ、仕事への刺激になりました。

【明德児童館・吉水文翁さん】

「ひとのま」宮田さんの、「自らSOSの発信に至らない人がたくさんいる」という言葉。どうしても目の前にいる人、目の前で起こることばかりに目を向けてしまいがちですが、児童館に来ない地域の子どもや家族も利用者であるということに、意識して取り組まなければならないことを教わりました。地域にはまだまだ福祉を必要としている人がいて、その方に児童館からどうアプローチができるのか、様々な方法でトライしていこうと思えました。

フォーラム担当者まとめ

池田英郎（錦林児童館長）

「人によりそい 地域にかかわり 共にあゆむ」

フォーラムを企画するなかで、一番意識した言葉です。私たちの基本姿勢を表した言葉ですが、その意味をみんなで考える機会になれば、と考えました。

「人によりそい」私たちは、目の前の人によりそえているのでしょうか？ 本当によりそうってどんなことなのでしょう？

「地域にかかわり」私たちは、なぜ地域とかかわるのでしょうか？ 地域の中にある、様々な人の顔が見えているのでしょうか？

「共にあゆむ」上からの支援のような形になっていないのでしょうか？ どうすれば、共にあゆむ関係ができるのでしょうか？

宮田さんの実践には、そんなことを考えるヒントがたくさん詰まっています。とてもシンプルな、「近くにいる人が困っていたら、とりあえず話を聴く」という姿に自分たちの原点のようなものを感じた方もおられたと思います。

また、ご登壇いただいた皆さんに共通した思いがあるように感じました。それぞれの実践は、形は違っても、全く別物じゃない。根っこところは同じかもしれない。皆さんの思いをつなげて形にしていくことを、協会の中でも外でもやっていきたい、という気持ちが高まりました。皆さん、ぜひ一緒に、とりあえず話をするところから！

下坂厚の写真日記⑥



12月7日 京都府庁にて 認知症の普及啓発を進めるため、京都府認知症応援大使の委嘱式が行われました。



講演会場の石川県立図書館 とても広くて素晴らしい図書館でした。こんな図書館なら毎日行きたくなります！



講演で訪れた富山県 富山湾越しに見える冠雪した立山連峰からのぼる日の出は美しかったです。

日本語作文コンクール

西七条/スヨルク・ウール・アルティンベックさん

西七条には4名の外国人ケアワーカーが正職員として働いています。2019年に来日し、特養で働くキルギス出身のスヨルク・ウール・アルティンベックさん（通称：アルティンさん）。

今年、「介護施設で働く外国人による日本語作文コンクール」で、優良賞に入賞されました。作文では、アルティンさんの行動的で勉強熱心なことが伺え、キルギスからトルコ、そして日本で仕事をしながら語学の勉強をしてきたこと、介護の仕事を行うきっかけやケアワーカーとして働く想いが書かれています。「誰かの応援をしたり、誰かの力になれるような介護職を目指したい」と語るアルティンさんにお話を伺いました。

Q：日本や日本人の印象は？

A：礼儀正しくルールを守る人が多いです。日本で2度財布を落としましたが、2度ともすぐに見つかりました。1度は自分が気づく前に警察から連絡があり、大変驚いたと同時に安全で素晴らしい国だと実感しました。

Q：職場では分からないことはどうしていますか？

A：先輩が丁寧に教えてくれます。正社員となって2年目。自分自身が先輩の立場になったため、後輩にアドバイスができるように心がけています。



入賞作文は、QRコードからアクセスできます

ジョブ tavi

総合福祉施設修徳/中島真也課長

11月9日（水）、(株)JTが企画する【ジョブTAVI】という教育プログラムに協力させていただきました。これは、中学生が実際に職場を見学、職員とインタビューし、その仕事を深く知ることが目的です。今回、滋賀県の近江兄弟社中学校から6名の学生が参加、修徳の中島真也課長が対応させていただきました。「失敗は今でもたくさんしています。でも、その都度、自分の力にすることが大事だと思います」この言葉が印象的でした。

